

Title	"Piers the Plowman"を通じて見たる英国社会状態
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.8 (1927. 8) ,p.1009(39)- 1060(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19270801-0039
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270801-0039">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270801-0039</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の如く生産の減少し始める前の月の相場が最も低い。

(三) 相場は最も高き月より最も低き月まで漸次低落し、最も低き月より高き月までは月々少しづつ騰貴してゐる。是れには勿論例外がある。

(四) 大正三年までの月別平均と大正七年までの月別平均とを比較するに、大正三年までの月別平均に於ては右の例外が大正七年までの月別平均に於けるよりも少なくなつてゐる。

“Piers the Plowman” を通じて見たる英國社會狀態

野村 兼 太郎

本稿を起草するまでに参照せることを得た書目は左の如くである。

- (I) “The Vision of William concerning Piers the Plowman” by William Langland, edited by Walter W. Skeat. (Clarendon Press Series) Oxford, 1906.
- (II) William Langland, “The Vision of Piers The Plowman” done into Modern English by W. Skeat. (The Medieval Library) London, 1922.
- (III) “Piers The Ploughmans Crede” edited by W. W. Skeat. Oxford, 1906.
- (VI) The Works of Geoffrey Chaucer, edited by W. W. Skeat. 5 vols. Oxford, 1900.
- (V) “Liber Albus” (Munimenta Gildhallae Londoniensis) edited by H. T. Riley. Rolls Series, 1895.

- (Va) 書籍 *Liber Albus* に現れたる倫敦の經濟生活(本誌第二十卷第十二號)
- (VI) “Memorials of London and London Life in the xiith, xivth, and xvth Centuries.” edited by H. T. Riley. London, 1868.
- (VII) John Strype, *Ecclesiastical Memorials relating chiefly to Religion, etc.* 6 vols. Oxford, 1822.
- (VIII) E. L. Cutts, *Scenes and Characters of the Middle Ages.* London, 1872.
- (IX) “Social Life in Britain from the Conquest to the Reformation” compiled by G. G. Coulton. Cambridge, 1919.
- (X) G. G. Coulton, *The Medieval Village.* Cambridge, 1926.
- (XI) D. Chadwick, *Social Life in the Days of Piers Plowman.* Cambridge, 1922.
- (XII) “Travel and Travellers of the Middle Ages.” edited by A. P. Newton. London, 1926.
- (XIII) Lord Ernle (Prothero), *English Farming, Past and Present.* London, 1922.
- (XIV) E. Lipson, *An Introduction to the Economic History of England.* London, 1920.
- (XV) W. J. Ashley, *An Introduction to English Economic History and Theory.* 2 vols. London, 1914.

(XVI) H. O. Meredith, *Outlines of the Economic History of England.* London.

(XVII) A. F. Pollard, *The History of England.* (Home University Library) London, 1919.

(XVIII) R. H. Snape, *English Monastic Finances in the Later Middle Ages.* Cambridge, 1926.

(以下上掲書引用の際には頭書の番號を以つて書名に代へる。)

以上の外参照すべき著作は少なくない。例へば C. Creighton, “History of Epidemics in Britain”の如き比較的新しいものから當時の *Ballad Book* や John Wycliff の著作、殊に *Piers the Plowman* の各版は参照する必要があつた。然しこゝに當時の社會、特に經濟的方面を觀察する上には、上述の *Skeat* の編纂書(I及びII)を以つてしても略々足りると思ひ、穿鑿不十分のまゝ筆を採つたのである。然し Chaucer 及び Wycliff に就いては他日の機會に別に起草し、傍ら本稿の補論としたいと考へてゐる。唯十分諸書を涉獵出來なかつた點は偏に讀者の寛恕を祈る次第である。

## 二

すべて如何なる著作と雖も、程度の差こそあれ、その著作された時代の反映ならざるはない。一見全く時代を離れ超越してゐると考へられるやうな著作でも、多

少の關係を有する。この點に於いて William Langland の著とされてゐる “Piers the Plowman” の如きは時代反映の著しいものであると云へる。第十四世紀に於ける英國の社會生活、社會思想を最もよく表現してゐるものゝ一つである。勿論本書は後に述ぶるが如く、當時の社會をそのままに描寫せんとしたものではない。諷刺であり、譬喩である。通俗詩である。従つてそこに現れた文字をそのままに歴史的事實と解釋することは甚だ危険である。文學書を通じて當時の社會狀態を観察せんとする時には、常に作者の藝術的誇張に就いて十分の戒心が必要とする。Dean Milman の Langland に對する批評は最もよく中世文獻史上に於けるその地位を明示するものであると思ふ。

「Chaucer 以前に、Wycliffe よりも以前に、露骨な諷刺、異様な頭韻詩、素樸な意旨、思想的及び政治的觀念、英國々民性、狀態、地方及び田園の情熱や感情等に就いてのこの異常なる表現は始まり、Chaucer 及び Wycliffe と共にこの過渡期、Edward 三世時代の描寫を完成する。その制度、言語、宗教的感情を通じて、チャートン主義は今や羅旬基

督教主義と最初の戦端を開きつゝあつた。Chaucer にあつては宮廷、城廓、都市、全英國からの叫びが聞える。…… Wycliffe にあつては大學から、神學及びスコラ哲學の講壇から、教職制度の中心地からの叫びが聞える。革命と反抗との叫びが全國を通じて祭司的統治に對して教壇に於いても起り反響した。Vision of Piers Plowman にあつては Malvern 丘の荒野からの叫びが聞える。恐らく賤しき牧師又は俗世的僧侶の聲であらう。著者は數年間をロンドンで暮したが、その故郷、その心は古代メルシアの中部英國に於ける貧しき地方民の中にある。」(History of Latin Christianity, vol. vi. p. 536; I. p. xxiii.)

然しラングランドの述べるところは單に地方的反響のみではない。都會、殊にロンドン生活の反映を示してゐることは一再に止まらない。何れにしても Piers the Plowman は當時の時勢に對し、大なる不平を抱き、權勢に反抗する政治的詩歌の一つであつたことは云ふまでもない。然しこゝではこれ等の社會不安や社會問題を詳述する餘裕がない。加ふるに Piers the Plowman の時代にあつては、後に述ぶるが如く、社會的不平も、Wat Tyler 等の百姓一揆の如きものがあつたとしても、なほ

第十六世紀に於けるその如く具象化したものではなかつた。多くの不平不満はいろいろな形式で聯絡なく現れてゐる時代であつた。この種のものが當時の社會組織を表現するに當つては、多少の誇張を以つてするのが普通である。この點に於いて Piers the Plowman もその例外とはならない。

以上の如き性質を有する述作であるから、すべてを言葉通りに解釋することは不當であるが、外國の支配階級に對するアングロ・サクソン民族の勃興を背景とし、都市經濟の發展せんとする時代にあつて、貧者のため、農民階級のため、殊に正義のために萬丈の氣焰を擧げてゐる態度は讀者をして多くの興味を感せしめるものであると思ふ。今細論に入るに先立つて少しくその梗概並びにその著者に就いて略述しよう。

## 三

本書の表題は屢々 “The Vision of Piers Plowman” 又は “Piers Plowman's Vision” と呼ばれてゐるが、後者は間違である。この *of* は關するの意である。羅句語の表題は Visio Willielmi de Petro (le) Plowman である。然るにこの *of* を written by の意に解し、

著者が Piers Plowman と云ふ假想的人物を借りて、一篇を想像したものとする誤りが最も普通に行はれてゐる。然し本書に現れた Piers Plowman は正直一偏の農夫頭であつて、時には人道主義的人物の典型となつてゐる。従つて Piers Plowman に依つて描かれた幻想でもなく、又 Piers Plowman 自身の幻想でもない。要するに Piers Plowman と云ふのは作中に現れて来る一人物に過ぎない。加ふるにこの Visio de Petro Plowman の云ふ部分は後に述ぶるが如く全篇の一部を構成するに過ぎない。(II. pp. x-xi)

今その梗概を述ぶるに當つて少しく本書の各版に就いて *Usque* に従ひ述べて置かうと思ふ。彼に依れば原書の寫本現存するもの四十五種以上あるが、著者が變更した點から見て大體三種に大別することが出来る。元來本書は著者にまつて生涯の事業であつて、屢々變更増訂をなして書直したものらしく、最初書かれた時から三十年間に多くの變化が加へられてゐる。然し少くとも二回これに大修正を行なつたものと考へられる。そこで假りに最初のを A-text と呼び、以下 B-text, C-text と稱する。此三者間に生じた變更に就いてはこゝでは省略する。(I. pp. ix-xii)

参照これ等の原書の著された年はA-textが一三六二年、B-textは一三七七年の初期、C-textは一三九二—一三九三年である。さらに刊行されたものも少なくなき、一五五〇年かのRobert Crowleyが少くとも三版刊行し、その一つからOwen Rogersが一五六一年版を出してゐる。Crowleyの版はB-textに屬する最良の原書に依つたもので、價值があるが、Rogersのは誤謬多く無價値である。Whitaker博士は一八一三年當時Heber所藏後に故Sir T. Phillipsの購入するところのC-textの一つを翻刻した。この版は相當注意深くなされたに拘らず、多くの誤を冒してゐる。然し彼の選んだ原本はこの種の中で最良のものである。そこでSkateは多くの訂正をなし、The Early English Text Societyから一八七三年に印行してゐる。さらにCambridge Trinity CollegeにあるB-textをWriteが一八四二年刊行し、一八五六年には同書の修正第二版を出してゐる。以上の外三つの原書を比較し註を附し、最も完全な形で公にされたものはSkateがThe Early English Text Societyのために編纂したものである。第一巻はA-textで、一八六六年に、第二巻はB-textで、一八六九年に、第三巻にはC-text及びRichard the Redelesを收め、一八七三年に、第四巻は註及び語彙その他からなり一

八七七年、一八八四年に公刊されてゐる。余が本論文を草するに當つて直接参照したものは本書の第二巻の分、即ちB-textである。(I. pp. xii-xiii)

なほこゝに一言して置かなければならないことはPierce the Ploughman's Credeと稱する書物に就いてである。この書はPiers the Plowmanとは全く關係がない。著者を異にすることは云ふまでもないが、主要人物として現れて來るPlowmanの觀念も全く別個のものである。Piers the Plowmanにあつては著者の夢の中に現れて來る正直精勵の基督教徒の權化であるが、この書に於いては現實に現れる貧者である。その見地もPiers the Plowmanのやうに高くない。唯一三九四年頃にPiers the Plowmanが一般に歡迎されるや、その題名を假りて世の注意を牽かんとしたものに過ぎない。八百五十行からなる詩で當時の修道僧を諷刺してゐる。I. p. xiii; III. preface.) 従つてこゝでは“Crede”に就いてはこれ以上觸れずに置く。かくその題名を假りて類書を現はすものがあるくらゐ、又上述の如く多くの人々に依つて翻刻さるゝくらゐ、Piers the Plowmanは一般に知られ、それだけ又社會的影響も少なくなかつたと云ふことが出來よう。

Piers the Plowman は三つの幻想又は夢から成立つ。第一は序辭に始まつて、第一節 (Passus) から第四節まで、第二は第五節から第七節までである。第三はそれ以下であつて、最初のもものは *the Field Full of Folk* の幻想(序辭) Holy-Church の幻想 (Pass. I) Lady Meed の幻想 (Pass. II-IV) に分かれ、次ぎは七つの極悪の罪の幻想 (Pass. V-1519) 及び Piers the Plowman の幻想 (Pass. V 520-651. VI. VII) に分かれ、第三のものは Do-well, Do-bet and Do-best の幻想である。これでも解かるやうに Piers the Plowman の現れて来るのは第五節であり、始めてその名が記されてゐるのは五百四十四行目 (“Peter!” quod a plowman and put forth his hed.) である。

著者は逍遙に疲れて Malvern Hill に腰を下し、何時か眠り夢を見るに序辭は始まる。この幻想は「人々の群れゐる野」The Field Full of Folk. であつて、いろいろの職業の人々がゐる。この野原は神である「真理」(Truth) の城と悪靈の隠家である牢獄とに近い。そこに百姓、放蕩者、隠遁者、商人、道化者、乞食、巡禮、受施僧、修道僧、牡牛を連れた贖罪者、司祭を棄て、來た僧侶がゐる。國王もゐる。一人の天使が彼に助言してゐる。と突然無数の大鼠、小鼠が現れ、こゝに猫に鈴を附けんと企てる有名な挿

話に加へられてゐる。この有名なお伽話は諸所で語られ、世間によく知られてゐるが、こゝで大鼠はロンドンの無数の市民を意味し、小鼠は同じく軽い地位の市民を指す。猫は Edward 三世である。市民と王室との關係を諷したものである。續いて、司法官、市民、商賣人、勞働者、酒屋等が大聲を擧げて顧客を求めてゐる。

第一節に至つて一人の愛らしい婦人が現れる。彼女に向つて遠くに見える塔が何であるかを尋ねると、人々に生活必要物を給する創造主の住み給ふ所と答へる。牢獄は「注意」Care の城廓で「偽の父」Father of Falseness が住む。その婦人の名を問ふと、「聖教會」Holy Church であると云ふ。そして「真理」は如何に大なる寶であるか、如何に「悪魔」が傲慢に依つて墮落するか、仕事なき信仰は死であり、天に至る途は「愛」に依ること等を教へる。

第二節で著者は彼女に如何にして偽りを知ることが出来るかと尋ねる。彼女は後を向けと云ふ。そこに「偽」と「阿諛」Flattery とがゐる。ふと側を見ると彼等はかりでなく、一人の華美な服装をした女がゐる。彼女は明日「偽」と結婚する「賄賂」Lady Meed である。「聖教會」はゐなくなる。結婚が整へられ、僧職賣買 Simony と「羅

馬法「Civil」とが「Falseness」と「Meed」の婚姻持參物の證書を敬々しく讀上げる。「神學」Theologyがこの結婚に異議を申立て、その適法なりや否やに就いて議論が生じた。そこで問題を決するため、Westminster に行かなければならないことになった。すべての者が馬に乗つてロンドンに向ふ。Meedは執行官に「Falseness」は審判官に連れられてゆく。「狡猾」Guile が道案内で、間もなく國王の法廷に到着した。國王は「Falseness」の奸計を惡み、これを罰せんとしたので、皆逃げ去り、唯「Meed」だけが囚へられる。

第三節は「Lady Meed」に關する項目である。彼女は國王の前に引出される。判官達は萬事好都合にゆくだらうと彼女に保證する。正義を装ふて、彼女は修道僧に懺悔をなし、償ひとして教會の窓の硝子を嵌めることを申出て懺悔を聞いてもらう。その後で直ぐ彼女は市長や判官達に賄賂を提供する。國王は彼女を「良心」Conscienceと結婚させやうとしたが、Conscienceは強く拒絶し、彼女の缺點を指摘した。彼女はこれに報ひ、自己辯護をなしたが、Conscienceはちやうどこれを駁し、サウル(Saul)の例を引いて貪欲の罪惡を示し、他日「理性」Reason が世界を統一し、惡事をなす者をすべて罰するに相違ないと宣した。

第四節。そこで國王は「Reason」を呼びにやる。「Reason」は「機智」Witと「睿智」Wisdomとを伴つて来る。この時「平和」Peaceが「惡」Wrongを訴訟せんとして入つて来る。その訴への當然なることを知つてゐる「Wrong」は「Meed」の援助で「Wit」や「Wisdom」を味方にし、贈物で「Peace」を買収せんとする。然し「Reason」は確乎として妄りに憐憫を加へず、國王に嚴正なる正義に基き行動するやうに助言する。國王は信服し、「Reason」に今後永久に自分の側に止まらんことを希望する。

第五節。こゝで夢見る人は目を醒ますが、間もなく再び夢に入る。彼は再び「人々の群れある野」に立つてゐる。そこには「Reason」が群集に先年の大疫病(一三四八年五月三十一日より一三四九年九月二十九日)に至る第一回、一三六一年八月十五日より一三六二年五月三日)に至る第二回、その他及び大暴風雨(一三六二年一月十五日)は神の裁であることを注意し説教をしてゐる。多くの者は感動し、後悔し、その罪を懺悔する。それ等の第一は「高慢」Prideで謙遜の誓を立てる。第二は「贅澤」Luxury又は「姪蕩」Lecheryと稱せらるゝ者で今後水のみを飲むことを誓ふ。第三

は「羨望」Envyで彼の悪い考や隣人を害せんとしたこと等を懺悔する。第四は「憤怒」Wrathと呼ぶ修道僧で、その叔母の尼僧と共にある修道院の料理方であり、庭師であつたが、多くの者を争はせた。第五は「貪欲」Avariceで、如何に偽り欺き、又高利で金を貸したかを懺悔した。彼は佛蘭西語の restitution(還付)の意味が解らず、竊盜のことだと思つた。第六は「暴食」Gluttonyで、教會に行く途中であつたが、あるロンドンの酒場で誘惑される。後に例示する如くその内部の状態を著者は生々と描寫してゐる。然し Gluttony も又後悔し償を誓ふが、始め彼は全く酔ひつづれ、その後自ら恥かしく感ずるのであつた。第七は「怠慢」Slothである。彼はその祈禱者よりもよく Robin Hood 物語を知つてゐる僧侶であつて、又聖者の傳記を讀むよりも、つと早く野原の兎を發見し得る男であつた。盜賊の Robert (Robert と云ふ名はその發音が robber に似てゐるため屢々盜賊の名に用ひられる)も悔み改め、宥恕を祈る。「後悔」Repentance はすべての悔罪者のために祈願する。そこですべての者が Truth を求め探さんとするも、誰もその途を知らない。間もなく一人の聖地巡禮者に逢つた。彼も多くの聖者の祠堂を巡つたが、Truth と云ふ名のもはなかつたと云ふ。この時 Piers the Plowman が現れ、Truthを知つてゐる旨を告げ、そこに至る途を教へる。

第六節。巡歴者一同はなほも案内者たらんことを求めるので、Piers は半エカアの畑を耕作した後に喜んで案内しようと思ふ。その間に彼は婦人達と一人の騎士とによき助言を與へる。出發する前に遺言をなし、それから彼の下に來たれる者に勞苦多き仕事をなさしめた。多くの者は彼等の仕事を怠けたが、そのため「飢餓」Hunger の嚴格な取扱に服従するやうになる。

第七節。この時 Truth (即ち神)は Piers に贖罪令を與へる。特に國王、騎士、僧正、勞働せる貧しき人々、及びそれよりも程度は低いが法律家及び商人にさへも與へられた。僧侶は Piers のこの贖罪の眞偽を論じ、これが實證を求めた。二人の間の議論があまりに烈しかつたので目が覺めてしまつた。最後の審判の日に於いては法皇の贖罪の價值少なく、勞苦の生活は遊惰の生活に遙かに優れることを以つて結末としてゐる。

第八節以下は The Visions of Do-well, Do-bet, and Do-best である。以下簡單に述べ

ると、後に Henry 八世の時代に對する豫言とも見るべき一句が Do-well の詩の中にある。即ち他日ある國王が出現して、宗教團體を破り、それ等の支配權を奪ふ。先づ Abingdon の大僧正は王から一打撃を與へられ、その傷は治すべからざるものとならうと云ふのである。然しこれは大體基督の傳記に暗示を得たものと思はれる。その他種々なることを論じてゐるがこゝには省略する。Do-bet の詩では Ab-faham に依つて人格化された「忠實」Faith と「希望」Hope とが登場する。これ等兩者は盜賊に打たれた負傷者の側を打過ぎて行つてしまつた。慈悲深き人、「愛」Love — Piers the Plowman の装をなした基督自身に外ならない——だけが彼を憐み、生命を救ふ。次ぎに詩は生々と基督の死を描いてゐる。生命と死との争、光明と暗黒との争、眞理と慈悲との結合、正義と平和との結合、他方救世主は墓に眠る。基督の古聖所下り、惡魔の征服を描く。然し Do-bet の詩になつて惡魔征服の完了せざることを示す。救世主は昇天し、反基督教徒が地上に來たり、教會は多くの敵から攻撃を受けた。「死」Death は國王や騎士、皇帝や法皇、及び多くの愛すべき婦人達を無に歸した。Envy は Conscience を憎み、Pride は Sloth が緊しく Conscience を包圍

した。彼は「悔恨」Contrition に救を求めたが、Contrition は阿諛する修道僧に水薬を盛られ眠つてゐる。然し Conscience は最後の勇を奮つて、Piers the Plowman を再び發見するまで巡歴しやうと決心する。こゝで夢が醒める。目に涙が一杯たまつてゐた。(I. pp. xxxi-xxxv; II. pp. xv-xxi.)

以上の梗概に依つても本書が如何なる性質のものであるかを了解出来ると思ふ。かく寓意的空想物語に過ぎないが、作者の意圖するところが當時の社會に對する不満であるからして、本書を通じて當時の状態を覗ふことが出来る。確かに第十四世紀に於ける英國生活を知る上に、過當の評価を與へることは出来ないとしても、有用なる文獻たることは疑ひ得ない。(XI. p. i.) 次ぎに本書の理解を助けるために著者の傳記に就いて略述しよう。

## 四

著者に就いて知らるゝところ甚だ少ないのである。Skat の勞多き穿鑿にも拘らず、十分な資料を有する斷定と云ひ得ないのである。第一上述せる數種の原文が同一人の手になつたか如何かと云ふ疑問も提供し得る。それに就いて最近の

研究者たる Chadwick は次ぎの如くに述べてゐる。

[Piers Plowman が一人の手になつたか大勢の手になつたかの問題はこの書で論じ盡さうとは思はない。然し實際上から見ても何れかに假定する必要がある。こゝでは三種の原文共に同一人の作と推定する。資料の見地から見るとこれはあり得ることである。多くの點が後の版に附加されてゐるけれども、議論にも態度にも實際的變化が殆どないことが認められよう。そこに生じてゐるやうな變化は時の立つにつれて、中年者の意見の固形化に依つて、又は當時惹起した事件に依るためとも云へよう。その取扱はれた主題が當時の者が議論してゐたもの、例へば法皇の贖罪權勞働者の地位の如のものに關して後の版と最初の見地と矛盾せず、寧ろそれ等を敷衍する傾向のあることは注意すべき點である。一世紀にも足らざる期間の中に、當時の社會に對する見地を表現する方法に於いても、又理想に於いても、殆ど異なるところなき改革者が三人又はそれ以上ゐたと信ずることは出來ないし、二人又はそれ以上の者が最初の作者の意圖をそのまゝに一致して遂行し得ることも、又行はんと欲することも信じ難い。](XI. pp. 2-3)

又事實上二三の變化を加へられた多くの原文が相當發見されてゐる今日、これを數人の著作と見るよりも唯一人の手になるものとするのが妥當であると思ふ。然しその著者が何人であり、又如何なる姓名であるかと云ふ點になると甚だ區々である。姓の方から云へば Langland と云ふのが通説であるが、Langley とも云ふ。名に至つては通説の William の外に Robert 又は John などと呼ばれてゐる。(I. pp. xiv-xvii) 然しかくの如きことはこゝでは重要ではない。如何に呼ばれたにせよ、その著者の生活を知り得れば足りる。

假りに Piers the Plowman の著者を通説に従つて William Langland と呼べば、彼は約一三三二年 Shropshire の Cleobury Mortimer に生れたらしい。彼の父は嘗つて Oxfordshire の Shipton-under-Wychwood に土地を所有してゐた百姓であつた。William は Malvern で教育されたらしく、少くとも Malvern Hill をよく知つてゐた。後年彼はロンドンに出て、永い間 Cornhill に妻の Kitt 娘の Calote と共に住んでゐたらしい。「私は永年ロンドンに住んでゐた。」(Ich have lyved in London meny longe yeres, C. xvii 286) 又著者は明かに都市生活に親しんでゐた。彼は以前のロンドン市長の名を挙げ、フ

ランダースの女のことを述べ、(Va, p. 90 参照) Westminster, Cheapside, Tyburn, Cock Lane に就いて語つてゐる。然し彼の生活は決して樂なものではなかつたらしい。(XI, p. 33) 彼は人々のために讚美歌等を唄つて極めて不確實な生活を送つてゐた。彼の最も樂しい追憶は子供の時兩親や友達に連れて行かれた僧庵のそれであつた。その僧侶としての生活に於いて著しい出世を妨げたことは恐らくその結婚であつたらう。彼は“Vision”を書く傍ら、一三九九年に於ける Richard 二世の廢位に關する詩を書いてゐた。その當時彼は Bristol に住んでゐた。この詩は“Richard the Redeless”と名附けられ、不完成のものである。彼は恐らく Chaucer の死亡したと同じ頃、一四〇〇年頃に死んだらしい。彼は“Long Will”と稱せられたところから見るに、“I have lyved in londe,” quod I, “my name is Longe Wille.”) 丈が高かつたと思はれる。(II. pp. ix-x; I. xvii-xxi.) 彼の生涯はこれ以上あまり知られてゐない。然し彼の生活がかなり苦しいものであり、直接多くの貧しい艱難を體驗してゐたことは明かにこの詩をして悲觀的傾向を有さしめ、その人生觀をして暗いものたらしめたを考へられる。「乞食は惠物として贈物を乞ひ、音樂師は愉悅の報酬として

贈物を要求する。王は平和の維持のために贈物を採り、教師は弟子から料金を採る」(Beggars for here biddynge bidden men Mede; / Mynstralles for he e murthe mede thei ask. / The kynge hath mede of his men to make pees in londe; / Men that teche chyldren craue of hem mede. I. p. 30) 又は「年老ひて白髪の方なき男達、子を持つてゐる女達、働くべき術もなし、病に臥し、盲たる男達、又は手足を挫ける、苦しみを耐え忍ぶ、癩病の如く」(Ac olde men & hore that helpless ben of strengthe, / And women with childe that worche re mowe, / Blynde and bedered and broken here membres, / That taketh this myschief mekelych as masesles and othere, . . . I. p. 82) を云ふやうな句が至るところに發見することが出来る。彼はかく當時の狀態に對し、かなり暗い觀察をなし、又彼自身の生活が苦しいものではあつたが、決してそのために意氣阻喪してしまふやうなことはなく、すでに述べたこの書の梗概を見ても解るやうに理想的である。吾人は悲觀的觀察をなす者に多く理想家を發見しがちであるが、Langland も確かにその一人であるを云ふことが出来る。

彼が又かう云ふ空想詩の中にならば現實社會を明かに把んでゐることは、後に

述ぶる引用に依つても知る事が出来るが、今一例として Skeat の現代語譯を一節引用して置く。

Now beginneth Sir Glutton to go to his shrift;

His course is to kirkward, as culprit to pray.

But Betty the brewster just bade him “Good-morrow,”

And asked him there with as to whither he went.

“To holy church haste I, to hear me a mass,

And straight to be shriven, and sin nevermore.”

“Good ale have I, gossip; Sir Glutton, assay it!”

“But hast thou hot spices at hand, in thy bag?”

“I have pepper and peony-seed, and a pound of garlick,

And a farthingworth of fennel-seed, for fasting-days.”

Then Glutton goes in, and with him great oaths.

Cicely the shoe-seller sat on the bench,

The warrener Wat, and his wife also,

Timothy the tinker, with two of his lad,

.....

And a heap of upholsterers, early assembled,

Gave Glutton, with glad cheer, a treat of good ale.

(II. pp. 79-80)

多少落語的可笑味を感じさせるがよく中世期に於ける酒場の光景を彷彿させる。吾人はかう云ふ社會の断面圖をかなり多く發見することが出来るが、中世社會の經濟狀態の總括的敘述を Langland に求めることは無理である。加ふるにそれ等の觀察も常に中世人として、封建時代の階級的服従の立場、基督教的觀察を離れることが出来なかつたことも云ふまでもない。

## 五

以下直ちに Piers the Plowman に現れた言葉を通じて當時の社會を観察する前に、少しく第十四世紀に於ける英國の地位を明かにして置く必要がある。さもなければ當時に於ける英國民の勃興を本當に理解することは困難であり、従つて Landlord 其他に現れた支配者階級に對する反抗の意義、又新興階級たる商人に對する態度を明かにすることが出来ないと思ふ。

羅馬人の英國占領以後、英國ほど他國民の支配に立つた國も少ない。サクソン人の侵入、ノルマン人の征服をこゝに絮説する必要もないだらう。然し國民の大多數を形成するのはアングロ・サクソン民族の後なる English である。従つて英國封建時代に於ける二個の階級は佛蘭西貴族と英吉利農民とである。この状態にあつては商業はこの農業制度に容れられざるものである。商業の發展、都市の發達、土地以外の富の發生は封建組織の内部に起り、これを破壊せんとするに至つた。Richard 一世や John 王に依つて都市に與へられた特許狀は確かにこの趨勢を強めるに預つて方があつた。(XVII, pp. 60-61) かくの如く第十三世紀以降著しい發展

を示して來た都市の市民を形成するものは主として英吉利民族である。こゝに從來佛蘭西より來たれるノルマン貴族のために全く壓迫されてゐた英國人が新しく勃興の氣運に再會したのである。一二六五年議會に市民が現れるやうになり、從來雜句語又は佛蘭西語が使用されてゐた公文書に、説教に、やがては文學にも不規則ながら英語が現れるやうになつた。Wycliffe が聖書の英譯を企て、Langland が一般人のためにその言葉で文學を作るやうになつた所以である。そして又かくの如き文學が後に一般に歡迎され、發達して來た理由は當時農民が假令彼等の領主に依つて大いに束縛されてゐたとは云へ、彼等の子供を一四〇六年の勞働條令に依つて開放された學校に續々送るやうになつた事實を知らなければ十分に了解出来ないだらう。(XVII, p. 77) かく國民主義の萌芽を當時に見るやうになつた理由は一つは前述の如く土地以外の財産の重要性が増加したため、商人階級の發達を見たためであるが、他方國王自身がその財政的必要からこれ等新興階級に特權を賦與したこと、又封建諸侯の勢力を阻止せんと欲し、進んでこれ等諸侯に壓迫されてゐた英民族と相結ばんとするに至つたこと等が新しい勢力を興すに強

い力となつたのである。

かくの如き傾向を具體的に促進したものとして二つの歴史的事實を擧げることが出来る。一つは國民的立法であり、他の一つは黒死病の流行である。國民的政策の發展は Edward 一世に始まり、幾多の變遷を経て、Tudor 王朝に至つて完成され、中央政府の極端なる干渉政策を生ずるに至つたのである。(その變遷の一例として拙稿「英國徒弟制度の變遷」本誌第二十卷第六號所載を参照されたい。) Edward 一世の時代に至るまで中央政府の活動は極めて限られた範圍を出なかつた。正確なる貨幣、度量衡の維持、日常必需品の價格の制定、簡単な詐欺や暴行の防止ぐらゐに過ぎない。かくの如き現象は別段中央政府の政策の原理から生じたものでもなく、又制定の煩雜さを恐れたためでもない。全く當時の經濟生活に於いて地方的特徴が濃厚であつたがために外ならない。然るに次第に生産が複雑となり、と共に、從來の組織では不十分となつて來た。「地方的團體の形式の産業組織は地方的市場に對する生産時代に適應するものである。各手工業がなしてゐたやうに、その都會及びその隣接區域にのみ供給し、比較的安全な需要に應じ、又僅な供給

を生産するに過ぎないので、一方生産者の利益——例へば職業許可の規定の如き——他方消費者の利益——例へば製品の品質に關する規定の如き——兩者の利益に於いて嚴密な監督に従はせることが出來たのであつた。これ等の状態が變つた時、その制度は必然放棄された。」(XV, Part. II, p. 20) 地方的監督制度は次第に破壊され、中央の統一を要求して來たのである。

Edward 一世の法制は明かに中央政府が積極的に國民の經濟生活に働きかけてゐることを示すものである。國內取引の安全、よりよき秩序と行政を維持することを目的とした市場や都市に於ける莫大な課税や王室の官吏の不當な徵發を禁止する法律、國道旅行の安全を計る法律、ロンドン警察法、難破船の財産所有者保護法の如き、又貨幣や商業に關する多くの規定、例へば一三〇三年の *carta mercatoria* の如き、多くの法律を發布した。(XVI, p. 90-92) 要するに Edward 一世の偉大さはいかゞの如き國民的傾向を推察し、これに順應した點にある。Edward 二世の時代が全く失敗に終つたことは未だ當時にあつては國王の賢愚が國政に於いて重要な要素を占めてゐたことを示すものである。又それと共に如何に薄弱な國王と雖

も諸侯がこれにさつて代ることは不可能になつて來たことを示してゐる。(XVII, p. 71) Langland 時代即ち Edward 三世及び Richard 二世の治世に於いては多くの重要な經濟的法案が發布された。一三三六年及び一三六三年の奢侈禁止法案、黒死病流行後の多くの勞働法、浮浪人取締法、その他の商工業取締の法案、不當利得の禁止等は英國商業の勃興を示し、穀物法、航海法の萌芽は國民的立法の色彩強きものである。(XVI, pp. 92-96)

第二の疫病流行に就いてはこゝに詳述する必要はなからうと思ふ。相次ぐ數回の流行(主なるものは一三四九、一三六二、一三六九、一三七五、一三七六年)は勞働人口の減少を來たし、一方封建制度下に於けるマナー農業組織の破壊を促進し、他方意識的又は無意識的に勞働者階級の自覺を生ずるに至つた。一三四八年八月 Weymouth から英國に這入り、又 Southampton から翌年入込んだ黒死病は非常な勢で英國を荒した。その盛んな時は人口の三分の一から二分の一を失はしめた。マナーの領主は土地所有者として、又勞働雇用者として損害を受けた。全家族が失はれ、又土地の大部分が自由小作人及び慣習小作人が跡取なくして死亡した。ゆゑ、

領主の手に歸された。多數の隸農も一般の混亂に乗じて借地を棄て、都會に逃れ、自由勞働者の階級に投じた。かく放棄された土地は非小作地を増加し、又彼等の逃亡は故國の田畠開發に利用し得る定住勞働量を減少した。マナーに止まつてゐた小作人達は領主の當惑に際し、賃銀の増加、勞務の代りに貨幣支拂を以つてすること、彼等の借地の増大、競争地代の原則の樹立等を要求する機會を得た。事實に於ける『大死亡』は自然的結果を生じた。地代の下落、賃銀の騰貴を來たした。土地の供給が需要に超過し、勞力の需要は供給より大であつたからである。(XIII, pp. 40-41)

以上略述したやうな封建組織の崩解と中央政府の權力擴張の初期にあたり、農業組織の變化と商工階級の勃興とが、詩人 Langland の目に如何に映じたか、これ次に述んと欲するところである。

## 六

Piers the Plowman を通じて現れる最初の不平は從來存してゐたところの階級的秩序が破壊されてゆくことであつた。國王や貴族、又は教會さへも、動産的富の前

は容易に屈服してゆくことは耐へられないことであつた。彼にとつて國王は平和の時には威儀嚴然たるものであり、假令恩愛を以つて人民に臨み、民主的のものでなければならぬと考へたとしても (It becometh a king, who a kingdom rules, / To give need unto men that meekly him serve, / To aliens and all men, and I honour them with gifts; II. p. 46) 國王は騎士の長であり、國內の平和を維持し、惡を所罰すべきものである。

(Both kings and their knights should keep to the Truth, / They should ride through the realm, and arrest the false, / Should take the transgressors, and tie them in bonds, / Till Truth should determine their trespasss; fine. II. p. 90) 又戦時にあつては國の保護者となり、人民の指導者であつて、軍隊の士官を選択任命すべきである。(The kynge is of a knyght, other for a kynge to be take, / And among here enemyes in mortells batailes, / To be culled and overcome the comune to defende. C. xviii. 289) 然るにその國王さへもその財産を浪費して、結婚に依り金庫の充實を計つたり、金貨業に依頼しなければならなかつたことは Langland の憂とするところであつた。かう云ふ事實は當時の上流階級——俗貴族たる僧侶たるを問はず、共に行はれてゐるところであつた。猶太人はこれ等の上流階級の

金融を取扱つて、莫大の利益を獲得してゐた。第十二世紀頃にすでに盛んであつた。然るに Edward 一世の初期に猶太人を追放したが、上流階級の必要は決して止まつたわけではないから、誰人かゞ代つてこれを満たさなければならなかつた。猶太人も絶滅されたわけではなく、又王室も暫く伊太利の富豪に依頼してゐた。このことは John 王の時代にすでに始まつてゐたが、第十三世紀を通じて増加して來た。一二七六年から一二九二年まで、ある關稅徵集權に對して Lucca 人から金を借りてゐた。一二九四年には Lucca 及び Florence の十個の商館から、それから少し後には Frescobaldi 家、次いで Bardi 家から借用した。Edward 三世はその負債の支拂を拒んだため、一三四五年にフロレンスの諸銀行は破産した。次ぎに暫く低地諸邦の金融業者がこれを行なつてゐたが、終には英國人の手に移つた。殊に Hull, London, Bristol のやうな都會では商業と金融業と相並んで行はれ、第十三世紀に於いては猶太人等と競争してゐたが、第十四世紀に至つて英國人自身が主として行ふやうになつた。(XVI, pp. 143-144) かくの如き變遷及び金貨業に就いて Langland は「貪欲」の懺悔を借りて次ぎのやうに述べてゐる。(II. pp. 249-250)

"Was usury ever a usage of thine?"

"Nay, soothly!" he answered, "except in my youth.

I learnt among Lombards and Jews this lesson,

To weigh the king's pence, and the heavy ones pare,

And lend them (to lose them) for love of the pledge;

So I worded the deed, if the day should be broken.

More manors are mine through arrears than mercy.

I have lent things to lords, and to ladies also,

And then been their broker, and I lought them myself.

Exchanges and loans are the chaffer I deal with.

When I lend, of each noble a portion they lose;

And with letters of Lombards bear money to Rome,

Here take it by tally, there tell it as less."

"Hast lent aught to lords, for love of their aid?"

"I have lent oft to lords, that ne'er loved me thereafter,

And made of a knight both a mercer and draper

Who paid, as apprentice, not one pair of gloves!"

XV, pp. 450-461 參照)

かく國王始め、多くの諸侯が多額の費用を必要とした所以は戦争と奢侈であつた。Langland は殊に贅澤なる濫費を擧げてゐる。この贅澤時代の中から詩人はいろいろなものを擧げてゐる。銀や純金の酒杯、その他の貴重品が贈物とされ、大厦高樓がよい投資物とされてゐた。然しこれ等の贅澤は當時の特徴であり、勞働者は高い賃銀を要求した。精勵な職人は苦みを受け、貧しき者は殊に疫病流行の後一層慘な有様となつた。(XI, p. 82) 貧しき者は寝るに藁の床で、毛布さへ持たぬ者があつた。これ等貧富の懸隔を甚しくさせる者は王と民衆との間にゐるところの司法官や役人に賄賂を送り、貧乏人を害し、不當の利得を得る商人であつた。

Langland の *Wastour* に従くは次々の如くである。(II, pp. 40-41)

Ye nace-men and mayors, that are midmost between  
The king and the commons, now keep well the laws,  
And punish on pilories and penitence-stools  
Brewers and bakers, and butchers and cooks;  
Such men, on this mould, can most harm work  
To the poorer people, the piece-meal buy;  
For they poison the people, both privily and oft,  
Grow rich by retailing, and house-rents buy  
With profits that else would suppo:t the poor:  
If true were their trade, they would triumph the less,  
And buy them no buildings—be ye well sure.

But Meed the maid the mayor had besought

Of all such sellers some silver to take,  
Or gifts without money, as goblets of silver,  
Rings, and rich present, retailers to please.

“For my love,” said that lady, “pray, love them each one,  
And suffer them sell things dishonestly dear.”

かく貧富の懸隔が甚しくなつて來たことを富の蓄積に對する愛好と見るべきであるが、主として動産、殊に貨幣に對する執著は當時すでに相當の通貨の存したことを意味する。このことは他の方面からも證明することが出来る。即ち Piers the Plowman 中に屢々金貨、銀貨、銅貨の記述の存することである。(XI, p. 69) 殊にそれ等の中で興味ある一例は前掲「貪欲」の懺悔中の一節である。即ち Skeat 現代語譯の “for love of the pledge” の一節原文は “Iene it for love of the crosse to legge a wedde and lese it” である。crosse は古い鑄貨の裏面に刻されてゐたと共に Shakespeare にもある如く貨幣そのものを意味する俗語である。(I, p. 139 note 参照) 蓋し「貪欲」は

鑄貨の十字架、即ち貨幣のためにを意味したのであらう。(XI, p. 9) 然し現在に於いても、これに類した滑稽が絶無であるを果して云ひ得るであらうか

以上吾人は Piers the Plowman に於いても諸所に舊社會組織の破壊の發端を發見し得るのである。その村落及び都會に於ける具體的現象に就いては後に述べるが、かくの如き社會的變化に對する Langland の考は、上述したところに依つても推測出来るが、甚だ保守的であると云ふべきであらう。彼に依れば理想的労働者は豊作の時でも昨日採つて野菜、一片酒と一片のペキンで満足すべきであつて、暖い魚肉又は獸肉などを要求するのは論外であると考へてゐたらしう。(II, pp. 11-112)

Then laboures landless, that lived by their hands,

Would deign not to dine upon worts a day old;

No pennyale pleased them, no piece of good bacon,

Only fresh flesh or fish, well fried or well baked,

Ever hot and still hotter, to heat well their maw.

かくの如きものを要求するならば労働者は高く雇はれなければならず、思ふに任せぬので神を呪ひ、國王や司法官を罵り、理由なく嘆ずる。かくて「饑餓」が來たり、不平も訴へ得なくなる。法律にも反抗しない。それほど「饑餓」の態度は嚴然たるものである。

I warn you, ye workmen, to win while ye may;

For Hunger now hitherward hastens full fast,

To wake you with water, and waters to starve.

Ere five years be fulfilled, such a famine shall rise,

Through floods and foul weather the fruits shall all fail;

So Saturn hath said, and hath sent you to warn.

かくの如き議論は今日でも、我國に於ける一部農村改良論者の云ふところであり、Langland は John Goner 等の當時の論者と共に、時勢を見る明の少かりし謗を甘んじて受けなければなるまい。(X, p. 235 以下参照)

## 七

中世の社會狀態を知る上に省略することの出来ないものは宗教團體の經濟生活である。中世期に於ける一般人の信仰心は頗る熾烈なものであるだけ、その影響は大なるものであつた。第十四世紀に於いて彼等僧侶の生活が甚だ豪奢なものになつてゐたことは Langland の疾に目をつけるところであつた。僧侶の豪欲なるを罵り、美しき衣裳を著けし偽善者であるとなした (B, xv 113; C, xvii. 269) 彼の要求するところ、又引いては當時の人々の間に、僧侶のなすべき義務、並びに特權に對して疑惑の念を抱くに至るのは當然であつた。僧侶は物質的又は精神的援助を必要とするすべての者に教へと助けを與ふべきものであり、その生涯は純潔高尚でなければならぬ。(XI, p. 17) 然るに彼等の生活そのものは諸侯に優ることも劣ることはなかつた。今寺院に於ける彼等の使用人の數を見て、その一般の生活を覗つて見よう。Edward 一世の時 St. Edmund's Bury の寺院に於いて八十人の monks、大僧正及び主要役員所屬の chaplains 十五人、その他役員の召使百十人以上は主として修道院内に住居する。その外その都會内にある所屬の禮拜堂、祈禱所、その他の建物に四十名の priests がゐた。自稱の仲間は無數である。(VII, p. 65) そ

れ等の使用人が如何なることをなしてゐたかは、次ぎの他の一例に依つても知るこゝが出来よう。第十四世紀末に於いて Salley Abbey に三十五人の召使がゐた。その中に靴工、理髮師、副院長の從僧、僧院長の料理人、僧院の料理人、パン焼の手傳、パン焼、醸造人、仕立師、牛飼、御者、臺所掛、家禽掛、勞働者、禽獸番、主事、森林番、羊飼、鍛冶工等である。(Opit, p. 66) かく擴張せる經濟を營む上に、僧侶の衣食住が次第に贅澤になつて來てゐたから、(Ac a portous that shulde be his plow-placebo to segge, / Haddde he nevre servyse to save sylver ther-to seith it with yvel will. B. xv 120) 到底財政の收支相償はなかつた。第十三世紀末に於いて Bolton のアグズチン派の Priory の通常収入は約五百磅であつたが、到底收支相償はない状態になつた。一例を挙げれば一三〇四年に於いて少なくとも三百六磅十九志の支出超過を見たのである。(XVIII, p. 97)

かくの如き状態にある僧院の僧侶達が貪欲となり、且つ頗る無智となつた。殊に疫病流行後の僧侶は極めて無學で、聖書すら十分に解することが出来ない者が多く、徒らに金錢獲得に躍躍するやうになつた。彼等の教區の財産では満足せず、

ロンドンに出て聖物賣買 (Symony; The act or practice of buying and selling ecclesiastical preferments, benefices, or emoluments; traffic in sacred things) をなさんために僧正の許可を得んとする者が多かつた。それ等はすべて貨幣のためであつた。(for silver ys swete) かくして Piers the Plowman の著者をして不完全な僧侶に依る教會がすべての罪惡を擴むる源泉なり (out of holichech alle yueles spredeth, / There imparfyt presthod is prechoures and techeres. B. xv. 93) と叫ばしむる所以となつたのである。

Langland は明かに宗教上の改革を欲してゐた。又前述の梗概に依つても了解出来るやうに、法皇に對して反感を有してゐた。殊に當時反佛蘭西的傾向の一般に起り始めてゐた時に、Avignon の法皇廳を非認せんとするのは當然であつた。Piers the Plowman 中に現れた法皇廳に於ける Neel の勢力は著者のこれを否定する一例とも見られるであらう。(In the palace of the pope shes (meed) as prime as myself, . . . II, p. 26)

前述の如く當時上流社會の通用語は佛蘭西語であつた。従つて佛蘭西語を知らないことは無教育を意味した。I lerned nevere rede on boke, / And I can no Frenche in

faith. (XI, p. 25) “I thought theft / restitution; for read could I never; / Such French as I know is of further Norfolk” (II, p. 76) 又一般にとつて羅馬は聖地に次いで尊敬され、西方文明の中心地、宗教の中心地として幾多の巡拜者を生じたのであつた。(VIII, p. 168) これ等一般になほ勢力を有してゐる事物に對し反抗し、宗教上に於いても外國の要素を否認せんとするのは明かに當時に於ける國民主義の反映である。英國に於いて教會を國民的支配に置かんとする努力は Edward 三世に依つてなされた。Lanfranc 及び Anselm に依つて支配されてゐた教會には英國としての勢力を認むることが出来なかつた。僧正その他は外國人の占むるところであり、大多數の英國人は最下級の僧侶にもなり得ない隸農であつた。然し英國國民の發展と共に英國人の教會を生じて來た。Simon de Montfort が政治に於ける外國人の勢力を排斥したやうに、Grosseteste は教會から排斥した。然し英國教會を外國のものとして異ならしめんとしたのは僧侶階級ではなくして俗的勢力であつた。(XVII, pp. 68-69) そしてこれが國王その他の権力者に依つて表面上行はれたものであつたとしても、一般の趨勢が排外的であつたことを否定することは出来ない。前述し

た Langland — 彼自身一時的ではあるが僧侶の列に身を置いたけれども、——の考はこの時勢の反映と解すべきものである。

宗教に關してはなほ述ぶべきことも少なくないが、あまりに長文に亘るを恐れ、これを割愛する。他日補苴するの機会があらうと思ふ。次に當時の經濟的  
生活の一つの中心たる村落の狀態に就いて述べようと思ふ。

## 八

第六節に於いて引用した Langland の言葉に依つても推量することが出来るやうに、多くの百姓一揆が生じてゐたにも拘らず農民の生活は向上しつゝあつた。英國の農夫はこれを大陸の農夫と比較すれば遙かに幸福であつたと云へる。大體に云へば物質的に英國の農夫一四五〇年から一五〇〇年に於いて中世初期よりもよく、少くとも第十七世紀第十八世紀の狀態よりも優れてゐた。(X, p. 9, 130) 第十四世紀に於いても物質的向上が多少とも現れたことゝ思はれるし、殊に前述の如く黒死病の後は一層物質的にもよくなり、又自由の範圍も擴大されたと思はれる。然し貴族その他の莫大の費用は彼等の勞力に依つて支拂はれなければな

らない。Langland が Meed の結婚に際する叙述は當時の貴族階級の無益の浪費を語るものである。(II, p. 26) 又廣大なるマナーの領主の城廓に對し、貧しい農民の生活を處々に描いてゐる。例へばその餘暇ある時は男は葺草を作つたり、杭を削つたりするし、女は織らねばならぬ。彼等自身の衣服を作り、靴を製する。(XI, p. 51) Chaucer に現れた上流階級の叙述と Langland の下層階級の描寫とを比較すれば封建治下に於ける村落生活が早晩その調和を破らんことは想像するに難くない。かかる状態にあつて貨幣使用も前述の如く次第に行はれんとするに當り、疫病の流行を生じたのであつた。この一大事件を Langland は如何に觀察してゐるかを次に述べよう。當時の恐るべき情況に就いては (II, p. 66)

He proved that the pestilences were purely for sin,

And the southwest wind, On Saturday at even,

Was plainly for our pride, and for no point else.

Pear-trees and plum-trees were puffed to the earth

For example to sinners, to serve God better.

Beches and broad oaks were blown to the ground,  
Turning upward their tails, as a token of dread  
That deadly sin, at doomsday, would condemn us all.

Langland の疫病に關する意見は當時の多くの著者と同じく天罰説である。黒死病の英國に入るや、種々多くの病氣がそれに伴つて生じた。(fevres and fluxes, / Coughs, and cardiacles, crampes, and tohaches, / Rewmes, and radegoundes and roynouse scales, / Byles, and bocches and breunyng agues, / Frenesytes, and foule yveles. B. xx 80) 單に人間に止まらず、他の動物、殊に羊に疫病が傳染したことは羊毛業を重要産業とする英國にとつては甚だ大なる損害であつた。然しこれに對する直接の記述は發見されない。唯羊毛を害する疾病の救済に關し述べてゐるばかりである。(XI, 58)

疫病が當時の人々に最も恐るべき打撃を與へたことは當然である。當時は勿論、その後と雖もあまり醫學の進歩しなかつた時、黒死病の再來が人々にとつて最大なる恐怖であつた。王も騎士も、皇帝も法皇も、あらゆる者を死の破滅に追込む

ものである。(cam dryvende after and al to donst passhed / Kyngs and knyghtes, kayseres and popes; / Lered ne lewed he let no man stonde, / That he hitte evene that evere sined after. / Many a lovely lady and lemmanes of knyghtes / Swouned and sweltd for sorwe of Dethes dynes. B. xx 99)

この打撃は確かに中世英國社會のあらゆる方面に於ける變化を促進させた。この變化は確かに Langland の好まざる傾向であつた。先づ家庭生活の秩序を破壊した。子供は甘く育てられた如きはその一例である。(And childryn cherisseyng be chastyng with yerdes; II. p. 40) 又多くのことを物質的にしてしまつた。義侠と云ふやうなことも失はれ、Langland に云はせれば結婚なども純然たる事務的のものに見做さるゝやうになつた。(XI, p. 102) 以上のやうな事柄は必ずしも疫病流行にのみ歸することは出来ない。すべての現象が物質的になり、事務的となり、生氣を失なつて來たのが當時の状況であつた。而してこの倦怠な空氣を破らんとして後に起つて來たものが Humanist の運動であつて、歐洲を通じての現象であつた。

最後に村落に就いての叙述を終るに際し、當時の耕作法に關する Langland の觀

察を省略することは出来ないが、あまりに長くなるのを恐れ、簡単に一瞥するに止める。中世に於ける耕作法に就いて彼はかなり詳細に述べてゐる。この點から見て彼自身は筋肉労働に従事したことがなかつたやうに見えるが、少くとも相當の知識を有してゐたのではないかと想像される。Langland は常に多數の人口に職業を與へると云ふ點から見ても農業の尊重すべきを述べ、農業を以つて最も重要なものとしてゐる。(They shall beat their swords into plough-shares(Isa. ii. 4)/ Each shall play with a plough, a pickax or spade, / Or spin, or spread dung; or perish in sloth. II, p. 51)

唯こゝに注意して置きたいことは開放耕地の制度(the open-field system)に就いてある。當時の多くの論者も示してゐるやうに、この制度は種々なる争の源泉となつた。Langland は隣地に入込んだり、刈つたりする者を排斥してゐる。(XIII, p. 156) 不正直なる農夫は "If I went to the plough, I pinched so narrowly that a foot-land or a furrow fetched I would; from my next neighbour nymen(取る) of his earth; and, if I reaped, (I would) overreach, or gave them counsel that reaped to seize to me with their sickles that which I sowed never." B. xiii, 371) かくの如きは中世期に於ける共同耕作に反する私の個々の耕作が、假令直接の證據がなかつたとしても、すでに存してゐたことを示すやうに思はれる。(X, p. 42)

## 九

第十四世紀に於いてすでに中世都市の隆盛期に到達してゐた。Piers the Plowman の中にある多くの都會に關する記述は明かに都市の繁榮を證明するものである。然しこゝに一々それを引用する餘裕がない。唯その概要を知るに止めやう。この時代に於ける都市の樞要なる機能は商業である。人口稠密なる地方に於いて定期的に開催されるものは市(market)である。

To Weyhill and Winchester I went to the fair

With all manner of wares, as my master bade;

If Guile had not given some grace to my ware.

It had still been unsold, were it seven years since [(II, pp. 74-75)]

又都市に於いて取引の場所は市場である。中世に於ける租税徴集の便宜から一定職業の者が一定の場所に集まる必要があつた。(XI, p. 63) 市場に於ける

取引の狀態は店舗の前に屋臺を出し、商品を陳列し、互に自己の商品の優秀なるを云ひ立て、聲高に客の注意を牽いた。そして互に相手の商品を罵詈し喧燥を極めてゐた。(ibid, p. 64)

I have been among burgeses, dwelling in London,

Getting brokers to backbite and blame men's ware.

If my neighbour could sell, while I sold not, right soon

Would I lower and lie, and lay on him blame. (II. p. 71)

かくの如き商人の利益は事實決して莫大なものではなかつたことは今日と雖も同様である。然し彼等の狡猾さや詐偽的行爲に對して Langland の如き著者は決して同情出来なかつたことは當然である。従つてかう云ふ人々に對する彼の批評は第六節にも引用したやうに峻嚴である。又市場に於ける買占や多くの利益を得て再賣する彼等の行爲をも罪惡と見做してゐた。(Forestaileth my fairs, and fights in my market, II. p. 58)

然し古代希臘に於けると同じく、當時に於いても大商人、殊に外國貿易の商人に

對しては甚だその趣を異にしてゐる。勿論中世期を通じて上流階級の者が貿易に種々なる方法で直接従事してゐたことも、その批評をして緩和せしめた所以であるかも知れない。Langland は條件附ではあるが、商人に贖罪を與へてゐる。少し長くはあるが左に引用する。(II. pp. 114-115)

But under secret seal Truth sent them a letter,

Full boldly to buy what best they could choose,

And sell it soon after and save well the profit,

Therewith to build hospitals, helping the sick,

Or roads that are rotten full rightly repair,

Or bridges, when broken, to build up anew,

Well marry poor maidens, or make of them nuns,

Poor people and pris'ners with food to provide,

Set scholars to school, or to some other crafts,

And relieve the religious, enhancing their rents;—

“I will send you Myself thcn Saint Michael Mine angel,  
Lest fendes should assault you, or fright you when dying,  
To help you from hopeless despair, and to send  
In safety your souls to My saints in their bliss.”

Then merchants were merry, wept many for joy,

And praised Piers the Plowman, who purchased this bull.

中世に於けるマナーの領主達はその領土から出来る産物を以つて彼等自身貿易に従事し、それで得た金で市又は市場に於いて彼等の必要な品物を購求する。貴族、僧正、否國王さへも第十四世紀及び第十五世紀には船舶を所有し、その召使を乗組ませ、外國と貿易を開き、多くの利益を得てゐた。第十三世紀に於いて Cistercian の僧侶達は王國內に於ける最大の羊毛商人であつた。第十五世紀に於いて Edward 四世は彼自身の利益のために貿易を營んでゐた。(VIII, p. 487) 而して最大なる利益を得てゐたのは前述の金融業者の營む商業であり、後世資本主義的組織を形

成する大資本の蓄積をなすに至つたのである。

都市に於ける貧富の差は村落以上に惨めであつたと思はれる。Langland の都會に關する記述の中一つの著しい點は乞食、浮浪人に就いてである。又中世に於てはこれ等の浮浪人が時に危険なる盜賊に變ずることも少なくなかつた。これ等の乞食の大部分は彼等の過失から乞食に陥ちた者ではあるが、火災のため——當時事實火災が少なくなかつた。Some tyme thorw a brewere / Many burgagys ben ybrent and bodyes ther-yne; / And thorw a candel clompyng in a corsed place, / Fel a doun, and for-brende forth al the rewe. (C IV 104) ——洪水のため、又人に欺かれて身を落す者もあつた。(XI, p. 75) かくの如き者の救済者として存してゐた寺院が前述の如く殆ど役に立たなくなつてしまつた當時に於いて、Langland が理想として宗教團體の覺醒を希望したとしても、それが單なる理想に止まつてゐる限り、一方に嚴重なる浮浪人取締を必要とし、(the Vagrancy Act of 1383) 又盜賊等を重刑に處する必要があつた。

(For which thou more highly hast claim to be hanged / Than for all the misdeds thou hast hitherto done, II, p. 76) として後に他方本來不能の者と怠惰な者とを區別する救貧法(一五

三六年)を規定せざるを得なくなつたのである。

以上 Piers the Plowman を通じて第十四世紀に於ける英國の社會狀態を觀察した。以上の外まだ論すべき點が少なくないが、思の外紙數を費したから、これを他の機會に譲る。吾人は當時の社會狀態に對する Langland の考へを眺める時、彼の思想が中世期に於ける眞面目な基督教徒以上に出ないことを知る。すでに述べたる疫病流行に對する天罰説は云ふまでもなく、その商業に對する意見、貧民に關する議論、その最もすぐれたりと思はるゝ宗教上の改革説にしても、恐らく當時の人々の胸裏に意識的に或ひは無意識的に存したるもの以上に出ないものであらう。然しそれだけ當時の英國人が將に國民的團結を組成せんとする途上の變遷を明かにする材料たり得る。故にこの Piers the Plowman の價值は第十四世紀に於ける英國の社會的スケッチを吾人に生々として示して呉れる點と當時の英國民の抱ける思想的傾向を示してゐる點にある。思想そのものに於いては Wyclif 等とは異なり、極めて平凡なものと云ふべきであらう。

(昭和二年七月十七日稿)

## 唯物史觀批評

平井新

本稿は Erich Brandenburg—Die materialistische Geschichtsauffassung, ihr Wesen und ihre Wandlungen, 1920. の序文と脚註を除く全譯である。本書はフランケンブルグが一九一九年十月三十一日ライプツヒヒ大學總長就任の際に試みた記念講演の原稿に訂正補筆したものである。紙數僅に七十頁に充たない小冊子ではあるが、唯物史觀の主要問題を拉し來て、著者獨特の史眼から簡潔明瞭に論評した才腕は道に巨匠を思はせる。著者は結局、唯物史觀に反對するが其の言ふ所、彼我共に傾聴すべきもの甚だ多く、殊に終始、内在的批評を以て臨んだ著者の態度は敬服の外はない。譯者は必ずしも悉く著者の見解に賛同するものではないが本書から受けた啓蒙示唆の決して少くなかつた事を斷言する。小冊子は云へ唯物史觀研究の旺盛なる今日、其信奉者も其反對者も共に必讀す可き良著と信ずる。

本書を譯したのは既に二年餘以前であるが今發表するに際して全く改譯した。此間絶へず示教激勵を賜つた小泉、加田兩先生に深く謝する次第である。又拙譯の掲載を快くお許し下さつた高橋誠一郎先生に厚く御禮申す次第である。唯々呉も遺憾な事は未熟なる語學のために、誤解誤譯の個所少なからず、獨り原著者に禮を失したのみならず、又是等諸先生の期待に背いた事である。大方の御叱正を俟つのみ。

因に原書名は「唯物史觀、其本質及び變遷」であるが假りに標題の如く改めた。

### 目次

#### 一、唯物史觀の歴史